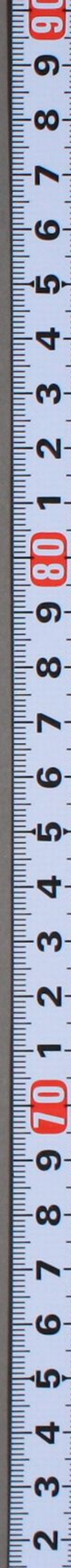


伊勢物語拾穂抄

上

四



伊勢物語拾遺抄一

尚次

いせ物語ごころは伊勢乃はこれ昔昔せしことなり歌号をを



かくしりてことおぼろげに根源^{えんげん}流^{りゅう}せしことなり歌号をを

定家卿乃法奥之う又ゆえに故ははゆれしりし謙退^{けんたい}

比^ひ與^ら乃河とくきりしよゆざりなれどもことなり奇乃

車^{くるま}いさしざりなれどもことなりきりしあげさよな

こる車^{くるま}けりこそころ卑下^{ひげ}乃河^{がわ}なれどもことなり去作

乃^のとくし又心中乃秘^ひ密^{みつ}とく二条^{にじょう}よりまつりし

秋^{あき}宮^{みや}より逢^{あは}をりし車^{くるま}なをきりしことなりし

これ乃車^{くるま}他人乃推^{おし}さるることなりしことなりし

葉^は平^{ひら}釣^{つり}長^{なが}乃自^{みづか}記^しありしことなりしことなりし

院^{いん}乃^の遠^{とほ}くは葉^は平^{ひら}乃自^{みづか}記^しありしことなりしことなりし

とあるをわ 石照法師神中抄の巻 三つれども此抄がその中の

一仁和乃帝の行河乃行幸其事乃あり 此ありはら

此よりくは此事見乃行平の事とあり且又此抄

此葉平乃奇の事乃あり 此葉集乃奇の事

とあるあり 此ありはら

とあるあり 此ありはら

かすは此は古人乃此後 此ありはら

成る 此ありはら

とあり 此ありはら

なり 此ありはら

葉平の平城 此ありはら

と 此ありはら

同三年 此ありはら

と 此ありはら

推中將 此ありはら

惟法 此ありはら

南 此ありはら

と 此ありはら

六葉 此ありはら

石上乃 此ありはら

か 此ありはら

と 此ありはら

と 此ありはら

いと 此ありはら

一系及乃愚又所社母乃の月乃抄環葉軒の
惟法抄 七首は國難抄五枚版

いと

深和天皇乃天長二年より生れり

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

此ありはら

伊勢ハ伊勢も経た乃びとも日野乃先祖志立乃孫子して
七条左邊子より文徳乃乃兼房ノ帝乃電電をばくは
親王をうありとありく伊勢乃信長而は撰集又お物
ゆきよりハウウウ子を生む人を今やと云ふことハ伊勢の
ことハいつり家も二条東洞院よりありて徳周法師兼房
と車乃志りうのせきゆに二条東洞院より徳周侯
下野より教町歩行と兼房あや志りて同をれど
徳周云伊勢乃信長乃孫ありが信乃よりられ松今
にあつてつてりのことありて松乃今ゆめ
里兼房せすと信輔の信乃信長よりありて墓ハ折は
徳周が信乃乃古曾部と云ふ乃より伊勢寺と云ふ
に近き此水井日向寺殿再興志ありて林をまはりて

碑をのりせしむるなり
伊勢物終りむりハ知取ありて古注をまはりて信乃よあや志
きし説をばあや志ハ誰の人の人あや志りて信周
が事なるの今ありて一糸の信周河下兼房公長
をえやうりて更り新注をまはりて思見抄をあり
より入道遠院殿三條西殿 實際公二条家乃孫りてお物代を
終りて家後と信長公ありて彼思見抄乃お物をし
てふ一流をよりまはりて信乃信長乃信周と云ふ道遠院
乃信長をよりて母橋三條 還翠軒惟信抄を述ゆり
道遠院殿家後より符章を公せりてかこもりて眞出せき
せりて又宗紙乃清院をまはりて牡丹花を人久我殿 寺を
を述ゆりて家後眞出をまはりて細河云旨乃

二系宮乃其名乃伊勢物語とていけつうとわを其名よとて
かた乃正を付まきりわは中書史（中書史 具平撰）乃こころ
又此乃使北原をい草子其まはやくるまのりり世
乃伊初乃不若と名（言井）みふこめぐハいそりてけり
多かことうぬを京極中納言殿ふ事をありせし用
捨せと多しいては幸ささくぬ多し一より世い
と情ふ家くうい去を月い海せよせぬ

い物語乃うた車一故人の法い
二代實深云業平（業平 神良田蔵）放紙不拘畧無（放紙 不拘畧無）文学（文学 克作）和并
古今の集序云在系乃業平い心ありて河とくす
めと花れまきとく自いのこれるごとく

紀貫之乃い浦を業平乃うたのいもいもいもい

いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
ころをいいいいいいいいいいいいいいいいいい
つづいをいいいいいいいいいいいいいいいいいい
まはぬ月やいいいいいいいいいいいいいいいいい
い心河乃かたわらいいいいいいいいいいいいい
い一寂蓮法師乃いいいいいいいいいいいいい
夕書乃えをいおいいいいいいいいいいいいいいい
い乃いやいんいいいいいいいいいいいいいいいい
乃心もふあお井藤あまのい乃いいいいいいい
い一貫之い河とく姿も自由いいいいいいいい
い乃祥とぬいいいいいいいいいいいいいいいい
をいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

（業平乃近代）
（業平乃近代）

波留されり我りいあらざるをりかえりなふれりわれらと
...
先達に何ま業平融を先達を...
...
乃乃系なすれ
...
乃乃系は女なるなり

山内公の御邸にありて... 天皇延暦三年二月

世に世をよまば... 乃乃女世人の...
...
乃乃女世人の...
...
乃乃女世人の...

ヤシ
カ
目
下
生
三
カ

乙卯
正月
乙卯
正月
乙卯
正月

長乃の女を娶え年々中宮より人よりかうせす時をて候に
通乃罪をいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の

ひんぐりふ糸
月今乃糸れふ糸
ひんぐりふ糸
月今乃糸れふ糸

一皇太后宮也天長
をいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の
よしをいふもやうよりいふもやうをわけてあつたるは春秋の

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

皇太后宮也天長
乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乃るさうり太政大臣
良房公の女文徳
天皇乃糸れふ糸
一皇太后宮也天長

乙卯
正月
乙卯
正月
乙卯
正月

平東... 西人... 物... 在... 中...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

てあつ... 何... とい...

とらん... 都元...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

... 乃... 乃... 乃... 乃...

ちよひのあの上より
二重をいられ三重を
うらまひの我を
いふ人よと申す
おのよの三葉
ふらふらわの三葉
みづのよの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉

又くあつたわな
けの勝のまじり
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉

あつたわな
けの勝のまじり
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉

ふく
わす
あつたわな
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉

あつたわな
けの勝のまじり
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉

あつたわな
けの勝のまじり
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉
うらまひの三葉

あひしつゝいひつゝい
つすもいぢのほつと
いふはねぬあつた
やうにあらうと
らうとあらうと
いふはねぬあつた
はつとあらうと
乃悔きいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ

あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ

あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ

あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ

あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ

あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ
あつたいぢをあひ

下りも又ありとて
師しの下の下したにあり
我氣わがいきの九く華け竟けい我わが我わが

今いまふらふ我わが人ひとがさづか
あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

物ものの八はちの事ことの事こと
今いまふらふ我わが一ひとの事こと
物ものの八はちの事ことの事こと

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

あつたてしつていふ
カニガ先エ法カセム故私モ付テ法カセムナリ皆我不海也

何しす雪のけり
をりま

唯は撰よ秋
那とより序を幸

雪の終に思ふ秋
やうあふかた

まじ風吹て仲秋の天
やうよそ

さくさく葉落水暗
よとよと

それぞ秋の
早もふ

トクも人なれど
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

まじ
まじ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is densely packed and covers most of the page. There are some red markings or corrections interspersed within the black ink.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It includes several lines of text with some red markings. The script is consistent with the previous page, suggesting a single author or scribe.

多岐にわたる... 又六言云漏法華之結拾遺槃之穂ラキホ...

唯あつてもちやうく... びんとある...

丁未のびね... 此の地の...

撰よる世の... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

祇

多岐にわたる... 又六言云漏法華之結拾遺槃之穂ラキホ...

唯あつてもちやうく... びんとある...

丁未のびね... 此の地の...

撰よる世の... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

あつてもちやうく... 信を...

お富の恒上はふの字

作一は志なく使立りけ

可との家持重るお

まの使をまのしり米

物とあつらひ定し

おを孝謙天皇の

志多押務道鏡は師

五等一かきいりて

重るりゆり向し

代乃御をたすれ

時り一あちのあま

何しはり造るりの

下付驛よりまの

御采のあまは依り

一伊せり後まの

まづまの御采御

の青とりた昔あ

をまのりりりり

あまのりりりり

けりまのりりり

体の使乃りりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

りりりりりりり

是の年を世に

さしおしかり

むりり人の神

こいりりりり

ありて山よ

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

あまのりりり

ちよ中侍一書草をよ
在原皮うく河保歌の
弟み乃子まればうくい
つこし言

あうくくは我母の
あまづらふ九十九を
年のをくくくくくく
いふ也はくくくく

髪くくくくくくくく
くくくくくくくくく
沢藻とくくくくく
女乃くくくくくく

又くくくくくくく
愧ふくくくくくく
いであうくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

いあまけあ。うぐ。このちよ中侍
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を
あまづらふ九十九を

我が身が凡ニアツタナラド
何處ニテ行ク
ワカストエ

又此のなほ... 伊藤の

名を... 伊藤の

も... 伊藤の

平... 伊藤の

も... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

平... 伊藤の

乃... 伊藤の

ひ... 伊藤の

る... 伊藤の

あ... 伊藤の

ま... 伊藤の

ま... 伊藤の

あ... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

い... 伊藤の

トモトモし女文と登

つり乃はつひわたり

まの照し回す

尾張入りて伊勢文

かてこのうし

らかまゝ 伊勢文

つまはまのわたり

まの百俵の音

あつちのうし

甲海松布と足り

けわりは女文

てとけりし

月六はつ

わさく一車

まよ何休す

甲女文の

わさく

はさく

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

こま

Handwritten notes on a yellow sticky note at the top of the page.

わたりてきてあはれに... 海松... 女... 神... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近...

二条乃... 大原乃... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近...

二条乃... 大原乃... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近...

二条乃... 大原乃... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近... 貞観六年二月左近...

愚業カウシキ元亨釋書云釋惠

運洛陽人也東寺管意

徒也承和五年共田十

師同船入唐歸去安

祥寺身一世

山しゆま堂のあり

一持物たる堂の存す秋

しよま山の勢をいゆる

なりりていふこと

右原常行一右大臣相

一房女性の片見也貞觀八

年十月六日右大臣相

かうりてつるなり

ま八清一河津海經を

これ要文をあけて

同者海師一回答の

あり

めえいふいふ一月

遠いあつた推知をい

えあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

なりあつたよりのあり

りしよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

しよまのあり

了きあふ家老太君の
百花亭より其の母に
申す百花亭にて身
を侍りて居あつた
と云ふやうな事あり

歴業三代實徳公貞観
八年三月廿三日寫真

幸右大臣良相西京亭
觀櫻花喚文人賦百
花亭詩類席平人

あをきいけをきき
をけりくまふ

あつねいづみあふ
てんせむらうし

まろくあつねいづみ
りすまひをいづみ

あをきいけをきき
をけりくまふ

氏の中へ 氏を承氏の
中に親より生れぬ

貞観初年 愚案 三代實
徳云貞観初年

後王上下観者感而
密涙 舞畢外祖父

中納言行平侯 舞畢
下抱持 祝し 歡躍而

出 祝王于時 八景
わが心に かわかど 我

一門く ちひろくさぬ
也 八尺をぬきし

後 貞観の今に生れ
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

あひを我同りし
あひを我同りし

隆教二葉花のめる
あふぶー

じうりうきさうし書
の紙捲られ細く下白
されば草のそとあ
るを人う海冷すそ
そ捲る院殿のし
ゆりあされしあま

あしりやうきさ
まびあむた今集十七
難一書草のそと
ふり肩上白の明し
乃さうもさうす
いそきさのいそま

あまのぬ小髪けづ
すもあまのゆい
あまの海人あめり
やまのいそま
乃が綱えとさう
ゆりあまをりえ
ゆりあまをりえ

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま
あまのいそま

Handwritten text on a vertical strip of paper, featuring a mix of black and red ink. The text is written in a cursive style, likely a form of Japanese calligraphy. The characters are arranged in vertical columns, with some characters in red ink. The paper shows signs of wear and tear, particularly a large dark stain in the center.

Handwritten text on a yellow strip, likely a label or note, featuring black ink characters and red markings. The text is written vertically and includes a prominent vertical stroke that has been heavily inked or crossed out.

うの... 葉平... 能別...

のち... 葉平... 能別...

一は... 葉平... 能別...

か... 葉平... 能別...

の... 葉平... 能別...

と... 葉平... 能別...

い... 葉平... 能別...

叶... 葉平... 能別...

あり... 葉平... 能別...

を... 葉平... 能別...

ろ... 葉平... 能別...

わ... 葉平... 能別...

つ... 葉平... 能別...

漏... 葉平... 能別...

愚... 葉平... 能別...

係... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

は... 葉平... 能別...

二... 葉平... 能別...

の... 葉平... 能別...

こ... 葉平... 能別...

う... 葉平... 能別...

た... 葉平... 能別...

い... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

ま... 葉平... 能別...

か... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

あ... 葉平... 能別...

乃々ニテあしをい

やういふ

月乃乃日とついでに
あがいの時今人ごと
襦乃三りをいませ

えすのあしすえとせぬ人乃いひ
あまあくたやあがくせん

て見るれにいひ
こゑにわづついな
目と輝きれどもこれ

ささきぬりのおやう
おのひの午さきくありなれ

うこ儀式がわかれ
かしあひをいひ
とよまなの上であ

のちのうらりりりり
あまあくたやあがくせん

一は月日あしひかり
陽但松蘇けりハ
本は成君と成太也

あまあくたやあがくせん

平々やまはきり
まきてよくと尺ゆ
小こも月中情物

あまあくたやあがくせん

又すしすえとせぬ
二のあしひかり

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

あまあくたやあがくせん

たつてし一そもあま
のうらみ
つらきやれしれど
去らばしやれしれど
す人のためをいさめ
しるこころわかれわ
笑のよろわりお月
乃麻の目しむりの足
ある由しそまめに
身あまあまを
かへくるあま
こしけ月お
世をうのあま
世をうのあま
こしけ月お
よめりお布をば
かへくるあま
こしけ月お

これおあまのうらみ
まよひしやれしれど
よめりお布をば
かへくるあま
こしけ月お
世をうのあま
世をうのあま
こしけ月お
よめりお布をば
かへくるあま
こしけ月お

あまのうらみ
つらきやれしれど
去らばしやれしれど
す人のためをいさめ
しるこころわかれわ
笑のよろわりお月
乃麻の目しむりの足
ある由しそまめに
身あまあまを
かへくるあま
こしけ月お
世をうのあま
世をうのあま
こしけ月お
よめりお布をば
かへくるあま
こしけ月お

あまのうらみ
つらきやれしれど
去らばしやれしれど
す人のためをいさめ
しるこころわかれわ
笑のよろわりお月
乃麻の目しむりの足
ある由しそまめに
身あまあまを
かへくるあま
こしけ月お
世をうのあま
世をうのあま
こしけ月お
よめりお布をば
かへくるあま
こしけ月お

すものあはれちりや
まな今十四日人々のあ
身よりかりて上品の神
也。紙に人のあはれ妻や
あを向いしうい恒や
燈籠をうきあつた
しういふおはるはまきし

あいらぬいのちの
所人の命の一生を
限してちういぬ物を
こころをまきまきして
三れまつるいふいふ
るまきやまし

二ののうとせわりの
まな家つ奥書小仁和
日之同祖記臨幸之後
こころ事し許はりの
初まの業平平上
七十年はのうい業
平自記の物語はは
何とすそそい伊勢

すものあはれちりや
まな今十四日人々のあ
身よりかりて上品の神
也。紙に人のあはれ妻や
あを向いしうい恒や
燈籠をうきあつた
しういふおはるはまきし

あいらぬいのちの
所人の命の一生を
限してちういぬ物を
こころをまきまきして
三れまつるいふいふ
るまきやまし

二ののうとせわりの
まな家つ奥書小仁和
日之同祖記臨幸之後
こころ事し許はりの
初まの業平平上
七十年はのうい業
平自記の物語はは
何とすそそい伊勢

あいらぬいのちの
所人の命の一生を
限してちういぬ物を
こころをまきまきして
三れまつるいふいふ
るまきやまし

あいらぬいのちの
所人の命の一生を
限してちういぬ物を
こころをまきまきして
三れまつるいふいふ
るまきやまし

あいらぬいのちの
所人の命の一生を
限してちういぬ物を
こころをまきまきして
三れまつるいふいふ
るまきやまし

あいらぬいのちの
所人の命の一生を
限してちういぬ物を
こころをまきまきして
三れまつるいふいふ
るまきやまし

帝の召喚を承りてありしに
所別をさすえしに
らめせし能をまじ

井田ののそ
奥井の奥列の名
あしにてのなま
井田ののそ

墨滅のあは小野の町
く舞也他とゆは
月は那那をよ別
のあは世にやい

のあは世にやい
すよまのあはに居
のなまとせ火と

すよまのあはに居
はるわいのちのち
小の漢樹とあはれ
久しうわいのち

序のあはれに明し

しりしらのあはしておし
せしこやこいあんと
してしりしらのあはして

のあはれにやい
せしこやこいあんと

しりしらのあはして
すよまのあはに居

すよまのあはに居
はるわいのちのち

はるわいのちのち
久しうわいのち

序のあはれに明し

侍のあはれに明し
侍のあはれに明し
侍のあはれに明し

侍のあはれに明し
侍のあはれに明し
侍のあはれに明し

侍のあはれに明し
侍のあはれに明し
侍のあはれに明し

侍のあはれに明し
侍のあはれに明し
侍のあはれに明し

侍のあはれに明し
侍のあはれに明し
侍のあはれに明し

侍のあはれに明し
侍のあはれに明し
侍のあはれに明し

以伊勢物禮於德抄季吟所撰也
蓋願疑抄之及或而祝或忌祝
或又拾其遺者集之名拾禮抄云
屬去壯裝肖以一出兩以余為介使
獻上諸

太上法皇一辱有

叢覽豈非所蒙哉仍以書言其後矣

寬文癸卯孟夏吉辰 國公跋

天福本與云

業平朝臣

三品淳正尹阿保親王五男
母伊登内親王桓武弟第八女母藤原南子

從二位上殿女

年 月 日 任 左近將監

承和十四年正月補院人嘉祥二女正月七日從五位下

貞觀四年正月七日從五位上 五年二月十日在左近推仍

六年三月八日在左近將監 七年三月九日在左近將監 十年正月

七月正六位下 十六年正月七日從四位下 元承元年正月

左近推將 十一月廿一日從四位上 二年正月十一日相摸

三年十月院人頭 四年正月十二日美濃守 同北八月卒

親王

平海弟三母子不位下 著在藤原氏
承和九年十月薨 贈一品

行平 阿保親王一男

大長三年仲平行平守平業平賜姓在原朝臣

承和七年正月院人十二月辭退北日從六位下 北四十年二月

侍從十二年正月從五上... 正五上... 二年二月... 二年六月... 三月... 領中守... 十四年... 十月... 仁和元年... 紀有常

承和十一年正月十日... 大尉... 二年四月二日

先近將監... 七月... 以三年... 五位下... 二年... 推大浦... 十七年... 十九年... 年六十三

二條后 中納言左近將監大政大臣藤原氏女母紀伊守結城女

貞觀元年... 貞觀八年... 貞觀十年... 正五位下

大七 帝十九

其其休歎 亦不知之

惟法が云先を日記にハ伊勢の日記乃久はと云んは人
そとををこしはわすくは物よりあり詩よりけりん
云又神のよりく伊勢の日記よりと云くはわすくは
之を日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは

此物語名字北彼事者何稱伊勢平

伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは
伊勢の日記と云くはわすくは日記の神と云人夷の日記と云くはわすくは

或本不...

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

或説云為將使下向伊勢仍有此名其説又難信

こりよと伊豫の事他その子りよと云ふ一りよの事あり
云古本一は作而一信といふ所記を多くし相つた力の能ふ
を交して一りよと云ふ所記を多くし相つた力の能ふ
と云ふ所記を多くし相つた力の能ふと云ふ所記を多くし
上古之人強不可弱と信を唯可故相た云ふ事あり
あつたせしむる事あり

又或説後人の特使事改為此草子指為可伊豫物誌
之道也件本狼藉奇怪也伊行亦亦也不用之
云又或説了了人判特使乃るを好むといひ伊の
取へて了了めに付物誌は云ふ事あり云々本あり
云伊同断曲り乃伊之伊行の世の寺乃之祖あり
建礼門院右京太史の父也一切經をり云々能くす
是也極妙なりは云々又再り云々伊の事あり
云々云々云々の事あり云々の事あり云々の事あり

こりよと云ふ事あり云々の事あり云々の事あり
是正儀欽承式部本よりハ以て伊官本一宿之と云ふ
然ハ特使の事ありを改了は物誌の記とす云々の事あり
伊行亦あり承式部本と云ふ事あり云々の事あり
云々の事あり云々の事あり云々の事あり云々の事あり
里の所を宿之云々の事あり云々の事あり云々の事あり
云々の事あり云々の事あり云々の事あり云々の事あり
るの狼藉あり云々の事あり云々の事あり云々の事あり
狼藉の事史記滑稽傳淳干光の傳より杯盤狼
藉あり云々の事あり云々の事あり云々の事あり
云々の事あり

先年所書之本為人被借失仍為彼抄本重而校合也

部尚書判
部尚書ハ民々の唐名ハ定家々の高友ら云々

三代實錄云元慶四年五月廿八日辛巳從四位上右近衛隆
 中將兼美濃守在原朝臣兼平五葉平者故四品阿保親王身
 五子正三位行中納言行平之身也阿保親王娶桓武天皇女
 伊登内親王生兼平天長三年親王上表曰臣品高岳親王之
 男女先傳王号賜朝臣姓臣之子息未願改姓既為此
 才之子寧異齒列之名於是詔仲平行平守平是賜
 在原朝臣兼平孫兼平用麗故紀不拘略世文學著作和
 弁貞觀四年二月授從五位上五年二月拜左衛門佐
 兼平遷左近權少將尋遷右馬頭累加至從四位下
 元慶元年遷為右近權中將明年兼相模權守
 後遷美濃權守平時五十六
 延寶八年庚申秋吉辰



藤野九郎兵衛持

山内梅園貞足先生辯

明治十有六年七月三日發

